

# 隨泉寺寺報

平成 26 年 (2014 年) 7 月号 第 527 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

安居会法座

講師 妙専寺住職 田阪 法雄師

講題 『安心の人生』

2014 年 06 月 06 日 第 25 代専如門主より『法統継承に際しての消息』が  
発布されました。

第 24 代即如ご門主から法統を継承され、専如さまが第 25 代門主に就任されました。  
6 月 5 日の「御譲渡式(ごじょうとしき)」を終え、6 月 6 日に御影堂で行われた「法  
統継承式」の「式典」で専如ご門主は満堂の参拝者を前に、初の「ご消息」となる「法  
統継承に際しての消息」を発布されました。

第 25 代門主 釋専如 大谷 光淳 (おおたにこうじゅん)

門主 (もんしゅ) には、本願寺住職が就任されます。門主は、法統  
を伝承して、わたくしたちの宗門を統一し、宗務を統理されます。  
親鸞聖人の孫、如信 (によしん) 上人が第二代をつがれて以来、聖人  
の子孫が本願寺をつがれ、現在の門主は第二十五代大谷光淳 (こうじゅん)  
門主 (専如上人・せんによしょうにん) であり、わたくしたちは  
「ご門主さま」とお呼びしています。

## 7 月の法座予定

- 7 月 2 日 ..... 本部役員会
- 7 月 13 日 ..... 掃除 荒野
- 7 月 15 日朝席午前 10 時より ..... 若い婦人の集い おとき
- 7 月 15 日昼席午後 1 時より ..... 安居会法座
- 7 月 27 日午後 5 時より ..... 隨泉寺ビアガーデン
- 8 月 2 日午後 5 時より ..... 門信徒会本部役員会



## 法統継承に際しての消息

本日、私は先代門主の意に従い、法統を継承し、本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門  
主に就任いたしました。ここに先代門主の長きにわたるご教導に深く感謝しますとともに、  
法統を継承した責任の重さを思い、能う限りの努力をいたす決意であります。

釈尊の説き明かされた阿弥陀如来のご本願の救いは、七高僧の教えを承けた宗祖親鸞聖人  
によって、浄土真宗というご法義として明らかにされ、その後、歴代の宗主方を中心として、  
多くの方々に支えられ、現代まで伝えられてきました。その流れを受け継いで今ここに法  
統を継承し、未来に向けてご法義が伝えられていきますよう、力を尽くしたいと思います。

宗門の過去をふりかえりますと、あるいは時代の常識に疑問を抱かなかったことによる対  
応、あるいは宗門を存続させるための苦渋の選択としての対応など、ご法義に順っていない  
と思える対応もなされてきました。このような過去に学び、時代の常識を無批判に受け  
入れることがないよう、また苦渋の選択が必要になる社会が再び到来しないよう、注意深  
く見極めていく必要があります。

宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁のある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご  
縁のない方々に対して、いかにはたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念  
仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、  
ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないで  
しょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えて  
いくのか、宗門の英知を結集する必要があります。

また、現代のさまざまな問題にどのように取り組むのか、とりわけ、  
東日本大震災をはじめとする多くの被災地の復興をどのように支援  
していくのかなど、問題は山積しています。

「自信教人信」のお言葉をいただき、現代の苦悩をともに背負い、御同朋の社会をめざし  
て皆様と歩んでまいりたいと思います。

平成二十六年 (二〇一四年) 六月六日

龍谷門主 釋 専 如

☆隨泉寺ビアガーデン 7 月 27 日 (日) 午後 5 時～

今年も 7 月 27 日午後 5 時から隨泉寺ビアガーデンを行います。節電でサマータイムを導入  
している企業もあり、クーラーは控えめ運転で、その分、冷たいビールで暑い夏を乗り  
切りたいと思います。東北地方の被災された方々には申し訳ありませんが、売り上げを伸  
ばして、社会貢献をしたいと思います。

お寺は皆さんのものです。どうもお寺の敷居が、高いのではないかと思います。

まずはビールを飲んで、それから少しずつお寺に近づいてください。一人で恥ずかしい人  
は友達を誘ってきてください。

☆ 若い婦人の集い 10 月 15 日午前 10 時～

7 月 15 日朝席は若い婦人の集いです。昔若かった人もどうぞお参りください。

出来れば若い人を誘ってお参りください。本堂が若い人や昔若かった人でいっぱいになれ  
ば、うれしいなと思っています。今回は一日だけの法座です。誘い合わせてお参りくださ  
い。これから当分本堂での御法座はお休みですから、ぜひともお参りください。



## 第二十四代即如御門主様ご退任

宗祖親鸞聖人が浄土真宗を開頭されてから今日まで、法灯は連綿と受け継がれ、次第相承されてきました。

去る昭和五十二年、即如御門主様には、第二十四代宗主として法統をご継承になりました。以来三十七年、変動激しい昭和・平成時代において宗門を統一し、宗務を統理され、全国組内のご巡教をはじめ世界各地へのご教化も重ねられ、常に宗門の興隆と充実発展にご活躍になりました。

### 退任に際しての消息

本日、平成26年6月5日をもって、私は本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主を退任し、後を本願寺嗣法・新門に託すことにいたしました。

昭和52年4月1日、法統を継承して以来、37年2か月になります。至ら ことが多々あった中、今日まで務めることができましたのは、仏祖のご加護は申すまでもなく、宗門内外の方々のご支援、ご理解とご協力のお蔭であります。皆様に、心より感謝申し上げます。

この間、本願寺では、阿弥陀堂の修復、顕如上人400回忌、蓮如上人500回遠忌、御影堂の修復、宗祖聖人750回大遠忌等のご縁を皆様とともにすることができました。

さらに、北境内地を取得できたお蔭で、活動をより広く展開できるようになりました。また、宗門では基幹運動の推進とともに、さまざまの活動や事業がありました。世界各地にも、お念仏の輪が広がっています。それらを、巡教などによって身近に知り、御同朋の思いを確かめることができましたこと、まことに有り難く思います。

この37年間は勝如前門主の戦争を挟んだ激変の50年に比べれば、やや穏やかとも言える時代でしたが、国内では大小の天災・人災が相次ぎ、経済価値が優先された結、心の問題も深刻化しました。世界では、武力紛争、経済格差、気候変動、核物質の拡散など、深刻なあるいは人類の生存に関わる課題が露わになりました。その中で、心残りは、浄土真宗に生きる私たちが十分に力を発揮できたとは言えないことです。

私たちの宗門は、門信徒一人ひとりに、み教えが受け継がれるという素晴らしい伝統をもっています。これからも、社会の変動の中にあって、浄土真宗のみ教えや伝統にある多様な可能性を見つけ出し、各人、各世代、それぞれの個性と条件を活かし、特に若い世代の感性と実行力を尊重して、一人でも多くの方を朋とし、御同朋の社会をめざして歩むことができるよう願っております。後を継ぎます新門主は、築地本願寺で5年9か月の間、副住職を務めて経験を積み見聞を広めています。今後は、法統を護るとともに、宗門全体を思い、広く宗教界を視野に入れて、務めることとなります。皆様の一層のご支援をお願いいたします。なお、私は、70歳まであと1年余りとなりました。先のことは予測できませんが、阿弥陀如来の揺るぎない本願力の中に、宗祖聖人のみ教えを仰ぎ、浄土真宗の僧侶としての務めを、できる限り たしたいと思っ



ております。

平成二十六年（二〇一四年）六月五日

龍谷門主 釋 即 如

## ☆7月 「おかげさま」の見える目 東井 義雄師

ぼくのむねの中に 一年 浦島 楯

『「おかあさん」「おかあさん」ぼくがいくらよんでも、へんじをしてくれないのです。なくなってしまったのです。きょねんの十二月八日に、かまぐらのはらで、ながいびょうきで、なくなったのです。』

いまぼくは、たのしみになっていた しょうがく一年生になり、まいにちげんきに、がっこうにかよっています。あたらしいようふく、ぼうし、ランドセル、くつで、りっぱな一ねんせいを、おかあさんにみせたいとおもいます。

ぼくは、あかんぼうのとき、おとうさんをなくしたので、きょうだいもなく、おかあさんと、ふたりきりでした。そのおかあさんまで、ぼくだけひとりおいて、おとうさんのいるおはかへ行ってしまったのです。いまは、おじさん、おばさんのうちにいます。まいにち、がっこうにいくまえに、おかあさんのいるぶつだんにむかって、いってまいりますをするので、おかあさんが、すぐそばにいるようなきがします。べんきょうをよくしておりこうになり、おとうさん、おかあさんによるこんでもらえるようなよい子になります。

でも、がっこうで、せんせいが、おとうさん・おかあさんのおはなしをするとき、ぼくは、さびしくてたまりません。でも、ぼくにもおかあさんはあります。いつも、むねのなかにいて、ぼくのことをみています。ぼくのだいすきなおかあさんは、おとなりの、みいぼうちゃんや、よっちゃんのおかあさんより、いちばんよいおかあさんだとおもいます。、おかあさん、ぼくはりっぱな人になりますから、いつまでも、ぼくのむねから、どこへもいかにみえてください。』

私も、小学1年になったばかりのとき、母を亡くしたので、浦島君が書いていることが、自分のことのように思われてならないのですが、学枚で、先生が、親のない子の思いなんか考えようともせず、「おとうさん」だとか「おかあさん」だとかいうときの、いいようのないやりきれなさ。あなたも、考えてみてやってほしいのです。ところが、この浦島君は、はっと「むねのなかにいるおかあさん」に気がつくのです。「みいぼうちゃんやよっちゃんのおかあさんより、もっともったいいおかあさんが、むねのなかにいてくれる」ということに気づくのです。

浦島君は、そのいのちの根っこに、「おかあさん」をもっているのです。その「おかあさん」を見る目をもっているのです。この浦島君なら、どんなつらいことにであっても、悲しいことにであっても、自殺なんかしないでしょうね。

いくら、頭がよくても、この「おかげさまの見える目」をもたないのでは、しあわせなんか、つかめないのではないのでしょうか。

